

地域の政治経済学—私の研究教育史

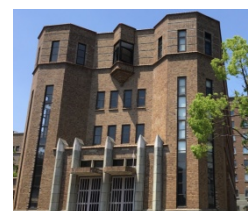
先週の猛暑の土曜日、京都大学で研究会があり、朝早く淀屋橋から京阪電車で出かけた。出町柳から歩いたが、意外に近かった。京大には忘れられない思い出がある。

院生のとき、科学研究費の事務局を担当していたが、書類提出ギリギリのところ、三村浩史先生に助けてもらったことがある。深夜まで書類づくりに追われたことを思いだす。もう一つは、島恭彦先生の「退官記念講義」である。大きな教室で緊張して聴講した「最終講義」。地域研究への関心と視座を得ることができた。最終講義が先生の『地域の政治と経済』自治体研究社、1976年に収録されている。冒頭部分を紹介したい。

今日、「地域」の問題は色々な学問分野で重要なテーマとなっていると思います。本来、「地域」とか「地域社会」という意味を我々が現に住んでいる「地域」という意味にとると、あたかも空気とか水とかいうようなものでありまして、ふつうの社会学者ならばこれまで学問の対象として意識しなかったものです。しかし、空気と水が汚染するときには、地域社会も大変住みにくい、ある意味では非常に危険な場所になってきています。そこで、地域社会の問題とその地域社会の改善、改革ということについては色々な学問分野の関心事になってきたわけです。

しかし、このきわめて我々にとって身近なわかりやすい地域という問題を、色々な学問の分野からつつこんでいくと、大変困難な複雑な問題がでてまいります。だからこそ色々な分野が協力して研究しなければならない学際的な問題、各研究分野にまたがる問題といわれているのだと思います。

それから、地域という概念も我々が住んでいるこの身のまわりの地域というだけではなくて、あるいは都市と農村、あるいは色々な産業の立地する地域、あるいは国家が存在する国土という意味での地域、それからもっと国際的な意味での、日本と諸外国との関連の問題、あるいは先進国と後進国との関連、等々という問題がからんでいると思うわけです。私はここでそういう非常に複雑な多面的な問題を、何か体系的にお話ししようとするものではありません。ほぼ40年近い私の研究の歴史のなかから、地域研究というような私の研究、あるいは研究以前の色々な考え方というようなものを、ここでまとめて皆さんにお話ししてみたいと思うのです。これは、ほとんど今まで、大学の講壇からはお話ししなかったことなので、それを、私なりにまとめてお話ししたいと思います。



(2019年6月1日)